

巣立つ人達へ

黒田 成子

先日ある研究誌を読んでいると日教授の文章が目につきました。先生は日本人には外国では見られない「気がね」という特有な傾向があると記されていました。私も海外生活が長かったので以前からそのことは強く感じていました。

例えば、アメリカ人の家庭を訪問して少し緊張していると、その家の主婦が日本の事情をよく知っている人ですと、“Don't be enryo.”という言い方をしたりします。つまり「おらしくに！」という英語の文章の中に「遠慮」という日本語をそのままつかうのです。それは「遠慮」とか「気がね」という意味にあたる英語がないからでした。気がねや遠慮に該当することばが欧米にないことは、その様なもの

考え方や生活様式が無いからであると思われれます。一方封建制度の名残りが職場や家庭生活に根深く浸透している日本の様な社会では「気がね」意識ということは日本人について語る時に当然出てくるものです。

たとえば子育てをしている両親に家庭教育で最も大切なことは？と質問すると「人に迷惑をかける子どもになってほしくない」という答が実に多いのです。また子どもの行動を改めさせたい時は、母親が好んでつかうことばに「先生に叱られるから」「○さんに笑われると恥ずかしい」「みっともないから」等という言い方をします。こうしたことを聞くと物事の根本的な意味や理由が忘れられ、感情的な

一方的な調子で子どもが叱られる光景が目には浮かびます。これでは意欲は育ちません。

中学一年生のY君が運動のグループで合宿に行った時のことです。彼は途中で熱が出て二日目で家へ帰されたのですが、翌日すっかりなおってしまいました。担任教師の話ではY君は先生の前ではいつも礼儀正しく、緊張しているので表情も固く、ことばもスムーズに出てこないということでした。先生と自由に話したり遊んだりする友達を羨ましく思っているY君自身は友達のように振るまうことはできませんでした。母親は何でもよく出来る人で責任感がつよく、Y君は約束等を守らないと厳しく叱られていました。この様な家庭環境に育ってY君はいつのまにか母親の顔をうかがい、気がねを身につけるようになりました。

「気がね」の一番マイナス面はいつも人の目を気にし、相手に迎合する様になることです。これでは自分が本当に相手に言いたいことが言えず、自発的

な発想も無くなってしまい、自立した人になることが難しくなります。

以上のような人たちが保育者になろうとしている今日、保育者養成では良い先生が育ちにくくなり、その問題がいつそう厳しく問われています。

しかも学生たちの多くは受験勉強の中で常に正解の解答が出せるように訓練されてきています。少子化現象などで人間関係が希薄になっている問題もあります。

また、これからは親も子も、教師も学生も、ますます相互のかわりあいの中で、対等に応答し合いながら共に生きることが要求されます。

三月は巣立ちの季節であり、早春の芽ばえに希望がわく時です。子どもや親達と出合う仕事に飛び立っていく学生たちは、自分の辿ってきた道を省みながら幼児教育への新しい自覚をもって進んでいくことを期待します。

(相愛学園)